カラー版　中国の詩集　11

女流名詩集

中国の詩集 11

女流名詩集

鈴木亨訳

訳者　鈴木　亨

1918年横浜市に生まれる．1942年慶応義塾大学文学部国文学科卒業．国文学者．詩人．跡見学園女子大学助教授．明治大学講師．「山の樹」主宰．詩論集『少年聖歌隊』，『近代詩入門』など．

昭和四十七年八月二十五日　初版発行

訳者　鈴木亨（すずき とおる）

発行者　角川源義

発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
郵東京一九五二〇八　電一〇二一
電話東京（二六三）七二一（大代表）

中国の詩集 ⑪
女流名詩集

印刷カラー　旭印刷株式会社
本文　信教印刷株式会社
製函　三真堂印刷紙器株式会社
製本　株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0398-590711-0946(0)

目次

周のうた『詩経』国風より　七
芣苢〈摘み草〉　八
汝墳〈妻のうた〉　一〇
終風〈つらい風〉　一三
伯兮〈あの方は……〉　一五
君子　役に于く〈あのひとは　いくさにいった……〉　一八
大車〈大きな車〉　二一
叔　田に于く〈あのひとが　狩に出かけりゃ……〉　二四
狡童〈ずるいひと〉　二六
東門の墠〈東門の広場〉　二〇
子が衿〈青い襟〉　三三
鶏鳴〈出勤〉　三四
東門の楊〈東門の柳〉　三六
漢・魏・六朝のうた　三九
悲愁の歌〈異国に嫁いで〉　烏孫公主　四〇
怨詩〈怨みのうた〉　王昭君　四二
怨歌行〈扇によせて〉　班婕妤　四六
古怨歌〈昔のひとに〉　竇玄の妻　四八
悲憤詩〈悲憤の詩〉　蔡琰　四九
古詩十九首　二首〈古詩〉　未詳　五三
孟珠歌　三首〈春のうた〉　孟珠　六八
団扇歌　三首〈うちわ〉　桃葉　七一
蚕糸を作る〈恋ごころ〉　未詳　七四
子夜歌　十首〈子夜のうた〉　子夜　七五
書後に題して　行人に寄す〈旅にある人に〉　鮑令暉　八三
古意　今人に贈る〈遠いひとに〉　同　八五
青渓小姑歌〈もみじ葉〉　青渓小姑　八八
歌一首〈小うた〉　蘇小小　八九
暮寒〈寒い日ぐれ〉　劉大娘　九〇
贈答〈夫に贈る〉　同　九一
婕妤に和する怨〈班婕妤に代って〉　同　九三
光宅寺〈わたどので……〉　劉令嫻　九四
甘蕉の葉に題して　人に示す〈芭蕉の葉に書いて人に贈る〉　同　九五
春歌〈春のうた〉　王金珠　九六
南に相思の木有り〈恋の木〉　同　九七
団扇歌〈白いうちわ〉　同　九八
映水曲〈水かがみ〉　沈満願　九九
残燈を咏ず〈残燈〉　同　一〇一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

木蘭辭〈木蘭従軍〉　未詳　一〇二
楊白花〈春怨〉　胡太后　一一三
歎疆場〈えくぼ〉　未詳　一一四

唐・宋のうた

池上の竹〈みぎわの竹〉　張文姫　一一六
沙上の鷺〈鷺〉　同　一一七
張雲容が舞うに贈る〈舞い姿〉　楊貴妃　一一八
相思怨〈恋こころ〉　李冶　一二〇
八　至〈とっても近くて……〉　同　一二三
趙生に贈る〈人に〉　歩非煙　一二三
春情　子安に寄す〈恋ぶみ〉　魚玄機　一二四
送　別〈別れ〉　同　一二七
子安に寄す〈春の別れ〉　同　一二八
送　別〈別れ〉　同　一三〇
暮春　感有りて　友人に寄す〈晩春の思いを　友に〉　同　一三二
夏日山居〈夏の山住み〉　同　一三四
隠霧亭に題す〈草の庵〉　同　一三六
重陽　雨に阻まる〈雨の重陽〉　同　一三八
江陵の愁望　子安に寄す〈燃えるかえでは……〉　同　一四〇
感懐　人に寄す〈心知るひとに〉　同　一四一
愁　思〈秋の思い〉　同　一四三
折楊柳〈きぬぎぬの別れ〉　同　一四五
夫に寄す〈夫にあてて〉　張氏　一四六
柳　絮〈柳のわた〉　薛濤　一四七
春　望　四首〈春のながめ〉　同　一四八
風〈風〉　同　一五二
月〈月〉　同　一五三
蟬〈せみ〉　同　一五四
友人を送る〈友の船出〉　同　一五五
秋　泉〈せせらぎ〉　同　一五六
燕子楼　二首〈たかどの〉　関盼盼　一五八
囉嗊曲　三首〈うた〉　劉采春　一六〇
金縷の衣〈わかい日〉　杜秋娘　一六二
夷陵歌〈唄〉　夷陵女子　一六四
如夢令〈海棠〉　李清照　一六六
芭　蕉〈芭蕉〉　同　一六八
九　日〈菊の佳節に〉　同　一七〇
永遇楽〈籠り居〉　同　一七二
声声慢〈秋のうた〉　同　一七六
父に寄す〈父にあてて〉　王荊公女　一七九
春　夜〈宵の春〉　朱淑真　一八〇

菩薩蛮〈秋　ひとり〉　朱淑真　一八三
感　懐〈春ごころ〉　黄氏女　一八四

明・清のうた　一八五

秋日書懐〈秋のおとずれ〉　孟叔卿　一八六
悼　亡〈魂まつり〉　同　一八七
蓮の塘〈蓮の堤〉　潘氏　一八八
重　陽〈菊の日〉　同　一八九
柳を咏ず　二首〈柳〉　同　一九〇
春　日〈春〉　顧氏　一九二
遠きに寄す〈遠い人に〉　陳氏　一九三
蘭汝吟　四首〈亡き夫を悼んで〉　一九四
薄少君
怨みを写す〈うらみ〉　馮小青　一九八
無　題〈こもり居の……〉　同　一九九
夜　月〈恋ごころ〉　王微　二〇一
春　閨〈ことばもなく……〉　許燕珍　二〇二
清明感懐〈清明のころ〉　周羽歩　二〇四
秋海棠〈秋の海棠〉　呉冰仙　二〇六
間　居〈こもり居〉　葛宜　二〇七
冬の閨怨〈冬の夜は……〉　楊惺惺　二〇八
親を思う〈親もとを離れて〉　席佩蘭　二一〇
鐘を聞く〈鐘〉　同　二一一
夏の夜　外に示す〈夏の夜　夫に〉　同　二一三
村の女に贈る〈村むすめ〉　王倩　二一四
病　中〈嘆き〉　陳淑蘭　二一六
病中口占　二首〈口ずさみ〉　同　二一八
鐘　声〈鐘の音〉　同　二二〇
古　意〈わかれ〉　王素雯　二二一
馮小青が雨燈に曲を読む図に、題す　二二二
三首〈馮小青の絵姿によせて〉　銭定嫻

解　説　二二五
作者小伝　二五一

女流名詩集

周のうた

『詩経』国風より

芣苢

芣苢を　采り采る
薄らく　言に　之を采る
芣苢を　采り采る
薄らく　言に　之を有る

芣苢を　采り采る
薄らく　言に　之を掇う
芣苢を　采り采る
薄らく　言に　之を採る

芣苢を　采り采る
薄らく　言に　之を袺る
芣苢を　采り采る
薄らく　言に　之を襭む

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈摘み草〉

おおばこ　つもう
せっせと　つもう
おおばこ　つもう
せっせと　つもう

おおばこ　つもう
その実も　とろう
おおばこ　つもう
その実も　とろう

つんだら　裾を
からげて　つつめ
つんだら　すそを
からげて　つつめ

汝墳

彼の汝墳に遵い
其の条枚を伐る
未だ　君子を見ず
怒として　調飢の如し

彼の汝墳に遵い
其の条肄を伐る
既に　君子を見る
我を遐棄せず

魴魚　赬尾
王室　燬くが如し
則ち　燬くが如しと雖も
父母　孔だ邇し

〈妻のうた〉

土堤(どて)であつめた　大えだ　小えだ
はしから切って　たきぎをつくろ——
いくさにいった　あなたのるすは
朝げをぬいて　しくつくおもい

土堤であつめた　ひこばえ　小ばえ
はしから折って　たきぎをつくろ——
やっとのことで　かえったあなた
わたしのために　いのちを捨てず

鮒魚は泣くと　尾(*)が赤くなる
お上(かみ)のおふれ　火のようにこわい
けれども二度と　いくさよあるな
ちちはは泣かす　お召しはごめん

終風

終風　且つ暴し
我を顧みて　則ち笑う
謔浪　笑敖す
中心　是れ　悼む

終風　且つ曀る
恵然として　肯て来る
往くと莫く　来ると莫く
悠悠として　我思う

終風　且つ噎る
日ならずして　有　噎る
寤めて　言に　寐ねられず
願うて　言に　則ち嚏す

噎噎として　其れ　陰る
虺虺として　其れ　雷す
寤めて　言に　寐ねられず
顧うて　言に　則ち懐む

〈つらい風〉

日がないちにち　風吹いて　そのすさまじさ
ふりかえりざま　こちら見て　あざ笑いする
かる口たたき　悪たれて　無頼なおひと
ほんとにわたしは　まいってしまう

日がないちにち　風ふいて　土まきあげる
どうした風の　吹きまわし　よいごきげんで
おこしになって　それっきり　またおみかぎり

つくづくわたしは　ためいきをつく

日がないちにち　風ふいて　どんよりくらい
ちらちら日ざし　あらわれて　またくもり空
こころはふさぎ　やすやすと　夜もねられず
どうにもわたしは　おもいくるしむ

晴れもやらない　くもり空　また押し垂れて
どっととどろく　かみなりに　くだけるこころ
ひどいしうちを　うらんでは　夜もねられず
いよいよわたしは　まいってしまう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com